

「已然形十ヤ」の構文について

——万葉集における「あれや」「なれや」をめぐって——

鎌倉暄子

一

麻績王流_ニ於伊勢國伊良虞嶋_ニ之時人哀傷作歌

打麻を麻績の王白水郎有哉_(注1)いらごの島の玉藻刈ります

(一・二三三)

右の歌の第三句「海人なれや」の解釈は、諸注釈書に見る限り、反語の意でとるか疑問の意でとるかの二通りに分かれるようである。一首の解釈を主な注釈書で見ると、例えば、

麻績の王は、海人であればとて、いらごの島の藻を刈っていらっしゃるのであらうか。(海人でもいらっしゃらないに、何としてまあおいたはしくも——)(注釈)

麻績王は海人であるのか(海人ではないに)、いらごの

島の藻を刈っていらっしゃることよ。(岩波大系)

麻績の王は、漁夫であるのだろうか、伊良虞の島の藻を刈っておいでになる。(全注釈)

とある様に、「注釈」「岩波大系」は反語の意でとり、「全注釈」は「深く疑っている意の條件法」と解して疑問の意ととっている。この歌は題詞にも言っている様に、海人ではない麻績王が流離の身で藻を刈っておられる姿を見て、哀傷の情にかられて詠んだものであり、「麻績王は海人なんかではないのに」という意識が根底にあることは否めない事実である。しかし、

玉梓の妹は珠かも足引きの清き山辺に蒔けば散りぬる
(七・一四一五)

吾妹子は衣にあらなむ秋風の寒きこの頃下に着ましを

(十・二二六〇)

の例にもある如く、現実にはあり得ない事でも「玉であるのかなあ」「衣であってほしいなあ」等と表現する事は万葉集ではままた例のあることで、何も特異なことではない。ここは「海人であろうか、いや海人なんかではないのに」の如く明らかに反語の意ととるより、「海人なのかしら」という程の意味で解し、言外に余情を残したものと解釈する方がより万葉的な解釈と思われる。そこで、「海人なれや」の「なれや」、つまり「已然形＋ヤ」の構文が如何なる意味機能を有しているのか、ここで他の用例を参照しつつ検討してみたいと思う。そこで先ず、

「なれや」を「なればや」の意と見るのは、萬葉集では普通のこととて、常識的なことであるが、古今集でもその通り考えてよいものかどうか。(佐伯梅友「『なれや』とある古今集の歌について」△学苑第百五十三号▽)

と述べられ、

あれにけりあはれいくよのやどなれやすみけむ人のお
とづれもせぬ(古今・九八四)

おもひせく心の内のたきなれやおつとは見れどおとの
きこえぬ(同・九三〇)

わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる

人のなき(同・五六〇)

などの古今集に見られる「なれや」は、「くかしら」という気持を表わしたものであり、「なれや」で句が切れるものと言及されている論考が思い起される。ただここでは古今集のみに限られ、先に引用した如く万葉集においては従来通りの解釈をなすべきものとされている。つまり万葉集における「已然形＋ヤ」の構文は疑問、反語の意であり、「ヤ」は係助詞として文末に係っていくものであるということである。しかし伝統が根強く生きている歌の世界において、古今集を万葉集から全く切り離していいものかということについては少しく疑問が残る。勿論、このことについては異った見解もある。例えば、「ヤ」の余情、特にその情緒性ともいうべきものについて、その意味の重点の移行が、疑問、反語のいずれでもない詠嘆の意味をもつ「なれや」という語形を新たに生じたとする論考である。^(注2)ところで、

百敷の大宮人は暇有也^{いとまあれや}梅をかざしてここに集へる(十・一八八三)

の「あれや」は、「なれや」の原形「にあれや」と同じ例と見なすべきものであるが、「暇あれや」をいわゆる「已然形＋ヤ」の構文に於ける反語の意と解して、「暇があるのであるうか、いや暇がないのに」としたのでは歌意をな

さない。かと言って単なる疑問とも解し得ない。ここはやはり佐伯博士の言われる「暇があるのかしら」と解して、ここで句が切れるものと見なす方が正鵠を得ていると思われる。第五句「集へる」の連体止めは詠嘆を表わし、天下太平を謳歌した歌と見るべきであろう。しかも、この歌を本歌とした本歌取りの歌、

題しらず

赤人

もしきの大宮人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ（新古今・一〇四）

を参看すると、結句は「けふもくらしつ」と終止形であり、「あれや」の「や」の結びでないことは明白である。これに対しても、

（百敷の）大宮人は暇があろうかありはしないが、それでも寸暇を利して、梅をかざしてここに集っていることよ。

と万葉歌を解釈し、新古今歌は、

たしかに単純な疑問と解してもよい語気が感じられよう（中略）作者から距離が出来たための誤伝だと考えられるのである。それは「ヤ」を受ける末尾が後述のように連体形になるべきであるのに終止形のままであることでも知られよう。（吉永登「已然形にヤの添うた形について」／＼万葉―その探究／所収）

とする考えがある。しかしこれは「已然形＋ヤ」が必ず反語

を表わすという前提に立ったうえでの索強のようにも感じられる。

この期のこれら終止的用法にて後世なきは「や」「か」の反語なり。「や」は動詞、純粹形式用言、複語尾の「む」音のものの已然形をうく。（山田孝雄「奈良朝文法史」とされて以来、「已然形＋ヤ」は多く反語をなすものとされて来たが、必ずしもそうとばかり考える必要はなく、佐伯博士の説は万葉集に於ても適用出来るのではないかと思われる。

山の際ゆ出雲の児らは霧有哉吉野の山の嶺に柵引く

（三・四二九）

潮満てば入りぬる磯の草有哉くさなれや見らく少く恋ふらくの多き（七・一三九四）

の「霧なれや」「草なれや」も、これまで述べてきた「已然形＋ヤ」の形として条件法を形成するものと言われ、「霧であろうか霧ではないのに」「草であろうか草ではないのに」と反語をなし、逆接的に下に続くというのである。勿論歌われている対象が霧や草そのものでないことは自明のことであり、ただ比喩的に用いられているものであるから、反語的に解してもそう不都合はない。これに対する注釈も、例えば、

出雲の児は霧なのであろうか、霧ではないのに吉野の

山のあたりに雲のようにたなびいている。(火葬の煙がめずらしかったのである。)(岩波)

磯に潮が満ちて来ると見えなくなってしまう海草というわけではないのに、恋しい人に逢うことは少なく、恋しく思うことばかり多いことよ。(岩波)

の如くであり、諸注大差はない。しかし、この様に解釈することはあまりに直截的で現代的な解釈と言うべきではなからうか。「疑問條件法をなす句」として、「霧だからか」「草であるのだろうか」と解している「全註釈」の解釈の方がより余情が感じられ、一首の意に相応しい様に思われる。ところで、これらの歌は、

伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定め

かねつる(古今・五〇九)

風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべ

らなり(同・六七二)

うき草のうへはしげれるふちなれや深き心をしる人の
なき(同・五三八)

等の歌と、その発想法や表現形式において酷似している。この古今集の例はいずれも「題しらず」「読人しらず」の歌であり、古い歌と目されるものであることを考えると、万葉集の四二九、一三九四番歌の「なれや」も佐伯博士が古今集において述べられたことと同様、「うなのかしら」

の意ととり、ここで切れているものと考えるべきではあるまいか。そして一首を「あの出雲の児は霧なのかしら。(だから)吉野の山の峯に棚引いているよ。」「あの人は潮が満ちてくると見えなくなってしまう磯の草なのかしら。(だから)会う事は少く恋うる事ばかり多いことよ。」と解釈する方が、万葉的な解釈と言えないであろうか。ところで、一三九四番歌の異伝歌とおぼしき歌が「歌経標式」に、

如_ミ孫王鹽焼戀歌曰_ハ

旨保美弓婆 伊利努留伊蘇能 俱佐那羅旨 美留比須

俱那俱 古不留與於保美

數々不_レ見 譬如_ミ潮盈之磯 盈時不_レ見 落時纔見

故斂爲_レ喩_ハ…(眞本)

と見える。第三句目の「草なれや」が「草ならし」となっている他は大きな違いはない。この「草ならし」の「ならし」は、今まで一般的には「なるらし」の融合縮約されたものであり「らし」は、

客観的な根拠に基づいて、現在の事態を確信的に推量する意を表わす(時代別国語辞典・上代篇)

助動詞とされ、「うらしい」の意とされてきた。しかし「香椎潟(第三十二号)」所載の拙稿「いわゆる推量の助動詞『らし』の考察」において述べた様に、「らし」の持つ本来の意味機能は推量ではなく、断定的な意を主観的情意的

に、しかも婉曲的に表現したものではないかと思われ、「」であるなあ」の意味に解すべきものと考える。されば、この万葉集と歌經標式の歌に於ける「草なれや」と「草ならし」の違いはそうかけ離れたものではなく、当時の人々にとっては同一歌としての認識でしかなかったのではあるまいか。加えて、この歌經標式眞本の例は抄本では、

鹽満者 入流磯乃 草有哉 美良久少 戀良久乃太寸
となっており、万葉歌と同じであることに留意すれば、より上述のことが明確に理解できるであろう。

以上考察してきた如く、従来多く反語と解されてきた「あれや」「なれや」は、その意味上からは必ずしも反語をとる必要はなく、肯定的な軽い疑問の意にとるべき例があることも否定出来ない事実として認識される。そこで、その語法上から「已然形＋ヤ」の構文を考察することにより、万葉集におけるそれらの例が古今集又はそれ以後の例と同じ意味機能を有するものか否かを明らかに出来るのではなからうか。

二

昔こそ外毛見之加吾妹子が奥つきと思へば愛しき佐保山（三・四七四）

人目多み眼社忍礼少くも心の内に吾が思はなくに（十

二・二九一一）

の第二句は、係助詞「コソ」の係りとして已然形で結んだもので形の上ではここで句が切れていると考えられる。しかしその歌意は、前者は「以前には自分には無縁のものと思っていた。（がしかし）愛しい妻が亡くなってその墓がそこにあると思うと何となく慕わしい佐保山だよ。」という意であり、後者は「人目が多いからお会いすることを耐えているのです。（がしかし）決して心の中であなただけを思っていないというのではありません。」の意であり、意味的には第二句で切れるのではなく下に繋っている。この様な例は枚挙に遑がなく、

玉くしろまき寝る妹も有者許曾夜あらはこその長けくも歡有倍吉うれしくあるべき
（十二・二八六五）

にしても、そのまま解釈すれば「手を枕にして一緒に寝る妻があるならば、秋の夜が長いのも嬉しいはずなのだがなあ」となる。しかし、この歌の心情は、言外にある「がしかし、その様な愛しい妻がいなから、秋の夜長がかえって恨めしい」というところにある。これは正に言外に込められた「コソ」已然形の持つ機能が顕現されているということにはかならない。この様な「コソ」已然形の構文には言外に逆接的に続く例が多いが、

そらみつ、大和の国は 押なべて 吾許曾居われこそぞ 敷なべ

て 吾^{われ}己^{こそ}曾^を座 我にこそは告らめ 家をも名をも (一)

・ (一)

の如き、明らかに順接で下に繋っている例もある。ところで、かかる用法は何もこの「こそ」已然形」の構文だけに限られたものではなく、已然形だけで表わされる、

家ざかりいます我妹を停めかね山^{やま}隠^{かく}都^つ礼^れ心どもなし

(三・四七一)

大船を荒海に漕ぎ出^{やふねたけ}八船多氣我が見し子らがまみはし
るしも (七・一二六六)

の事例を参照すると、「隠しつれ(ば)」「や船たけ(ど)」と、順接逆接は別にして、下に続いて行く機能を有していることは明らかで、佐伯梅友博士が「已然形でいひ放つ法」萬葉雜記「所収」で述べておられる通りであり、かかる用法は古代語法の名残と見なすことが出来よう。従って、

已然形は、奈良時代以前から、それだけで順接・逆接の前提句を形成する機能をもっていた。こそは、その前提句を、多く逆接とするために投入されたのだった。

(大野晋「日本古典文法」△解釈と鑑賞△昭和三十一年)

とある通り、「こそ」已然形」の機能も、已然形そのものの働きに依存していると見るべきである。されば「已然形

「ヤ」の構文も、已然形本来の機能を持つ語形に間投助詞「ヤ」がついたものと見なされなくもない。間投助詞は日本語の助詞の原初的なものと考えられ、格助詞、接続助詞、係助詞、感動助詞等も間投助詞から派生した蓋然性が極めて高い。今考察している「ヤ」にしても、例えその意味するところが疑問又は反語と見なしたとしても、間投助詞から派生したことは否めないであろう。

石^{いは}見^み乃^の也^や高角山の本の間より我が振る袖を妹見つらむ

か (二・一三二)

天^{あま}飛^{とぶ}也^や輕の路は吾妹子が里にしあれば (二・二〇七)

惶^{かしこ}八^や神のわたりは吹く風も和には吹かず (十三・三三五)

一八)

吾^わ妹^も兒^こ哉^や汝が待つ君は沖つ浪来寄る白玉 (十三・三三三)

一八)

の例でも明かなように、間投助詞は自由にいろいろな語について、或いは調子を整え、或いは感動を表わし、或いは意味を強調している。またその接続も各活用形に亘っており、已然形についた例があっても何等異様とは思われない。特に、

河渚にも雪^{ゆき}波^は布^ふ礼^れ之宮の内に千鳥鳴くらし居む所無

み (一九・四二八八)

の例には多少疑問はあるが、多くの代表的注釈書が解釈し

ている様に、第二句「降れれし」が、「降る」に完了の助動詞「り」の已然形のついた「降れれ」に強意の助詞「し」のついたものとすればこれはその一例となり、已然形に間投助詞「ヤ」がついた可能性も大きいと言えよう。^(注3)従って、冒頭歌に於ける「ヤ」も間投助詞の遺影をとどめていると推定できるのではなからうか。

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ（古今・二八三）

ちはやぶる神やきりけむつくからにちとせの坂もこえぬべらなり（同・三四八）

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖のつゆけき（同・三六九）

の「ヤ」は疑問の係助詞と言われているものであるが、その意味するところは「もみぢの錦が途中で切れてしまいましようか（多分そうでしょう）」「神がお切りになったのでしょうか（多分そうでしょう）」「夜がふけたのでしょうか（多分そうでしょう）」という程のものであり、多分に肯定的な意を含んだものである。それ故、間投助詞と見なしてもそう不都合はなく、間投助詞から軽い疑問の係助詞へ移行していく過渡期的のものと言うことも出来る。さて、

常世辺に住むべきものを剣大刀己が心から於曾也是君

（九・一七四一）

の「ヤ」は明らかに詠嘆を表わしており、この様な例は、

秋の野に凝りたる露は玉成哉買きかくる蜘蛛の糸筋（新撰万葉・三八二）^(注4)

思ふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくとするしたひも（古今・五〇七）

に見られる「ヤ」と同様のものと考えられ、間投助詞「ヤ」が詠嘆の助詞、そして疑問、反語の係助詞に移行してしまいう以前の過渡的姿をとどめているものと見なされる。かかる意味機能の変遷をした語は「ヤ」のみにとどまらず、「か」「かも」「は」「はも」等がある。「は」「はも」は疑問の係助詞ではないが、「か」「かも」は正に疑問の係助詞として周く認められている助詞である。

山縣に蒔ける菰菜も吉備人と共にし摘めば多怒斯久母阿流迦（記歌謡・五四）^{あるか}

み吉野の象山の間の木末にはここだも騒く鳥之聲可聞（六・九二四）^{とりのかゑかも}

は明らかに詠嘆を表わしている感動助詞の例である。

きこしをす国のまほらぞかにかくにほしきまにまに斯可尔波阿羅慈迦（五・八〇〇）^(注5)

足引の山に白きは我が宿に昨日の夕べ零之雪疑意（十・二三二四）^{ふれるゆきかも}

冬こもり春の大野を焼く人は焼不足香文吾が心焼く^{やきたらねかも}

(七・一三三六)

は疑問の意を表わし、

神樹にも手は触るといふをうつたへに人妻と言へば不_ふれ

觸物可聞_{ぬものかも} (四・五一七)

青丹よし奈良にある妹がたかたかに待つらむ心之可_{しか}爾

波安良司可_{はあらじか} (十八・四一〇七)

は反語であることは明白である。ところで、八〇〇番歌の「阿羅慈迦」と四一〇七番歌の「安良司可」は同一語形でありながら、前者は疑問の意であり後者は反語的である。

このことは一見奇妙とも思われるが非常に注目されることである。というのは、疑問が強くなっていくと「」ではなからうか、いやそんなことはあるまい」という反語の意に変って行くのは当然のことであり、この様な例の存在は疑問から反語への移行が極めて自然であることの一つの証左と言えるのではなからうか。また、

さひのくま松の隈川の瀬を速み君が手取らば将_{こと}縁_{よせ}言_む 毳_{かも} (七・一一〇九)

の「かも」は詠嘆にも軽い疑問にも解釈出来る例であるが、たとえ疑問と見なすにしても多分に肯定的な意が強く、詠嘆から疑問への移行も自然に行われたであろうと推察できるのである。そして、この場合の「かも」はまだ係助詞になりきっていない過渡的な姿をなしていると言ふべきであ

る。これらのことから、「や」「か(も)」共に間投助詞に由

来し詠嘆を表わす感動助詞になり、それから更に疑問、そして反語を表わす係助詞となつて行ったことは十分に首肯される。そこで、冒頭歌に於ける「なれや」は間投助詞

「や」が詠嘆から疑問へ移っていく、そしてまだ疑問の意になりきっていない過渡期の形をとどめているものと考え

てよいのではあるまいか。従来「已然形+ヤ」の形として、おほろかに我し思はば人妻にありと云ふ妹に戀管有米_{こひつあらめ}也_や (十二・二九〇九)

妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を和須礼弓於毛_{わすれておも}倍也_{へや} (十五・三六〇四)

等と同様反語の意と解釈されているが、

何せむに 吾乎召良米夜_{わをめすらめや} 明らけく 吾が知る事を

歌人と 和乎召良米夜_{わをめすらめや} 笛吹きと 和乎召良米夜_{わをめすらめや} 琴

ひきと 和乎召良米夜_{わをめすらめや} (十六・三八八六)

の「らめや」などは、何も反語とばかり解釈しなくても、疑問ととり「」かしら」という意に解釈しても一向差支えなく、佐伯梅友博士が「萬葉集の助詞二題」に述べておられる様に、反語の例からは除外すべきであろう。

今よりは不_{あはじ}相跡為也_{とすれや} 白妙の我が衣袖の乾る時もなき

(十二・二九五四)

の「すれや」も諸注反語と解し、「もう逢うまいとしてい

るのか、そうではないのに、私の衣の袖は涙で乾く時もない」と訳し、「ヤ」は条件法の係助詞と見なしている。しかし「乾る時もなき」は「我が衣袖の」に対して、つまり「の」という格助詞を受けての連体形終止であり、「すれや」の「ヤ」の結びとは考えられない。「の」とあるからこそ連体形で終止して詠嘆を表わしているのである。されば「すれや」は「已然形＋ヤ」のかたちではあっても係助詞として下に続いているのではなく、ここで文が切れていると見なすべきであり、「ヤ」は感動助詞の性質の強いものと判断される。従ってここは「もう逢うまいとするからかしら。私の衣の袖は涙で乾く時ありません。」と解釈すべきものと考えられる。そうしてはじめて作者の心情の動きが手に取る様に分かると言えよう。この例以外にも、特に、

円方の湊の渚鳥波立也妻呼びたてて辺に近づくも（七・一一六二）
なみたてや

朝るでに来鳴くかは鳥汝だにも君丹戀八時わかず鳴く（十・一八二三）
きみにこふれや

などは、「ヤ」が反語の係助詞とは到底考えられない例である。

淡島の会はじと思ふ伊毛尔安礼也安いも寝ずて吾が恋ひ渡る（十五・三六三三）
いもにあれや

の例は、先に挙げた二九五四番歌と意味内容、表現形式が非常に似ており、この「あれや」はどう見ても二九五四番歌の「すれや」と同じ機能のものと解せざるを得ない。とすれば、冒頭歌等に於ける「なれや」「あれや」の事例をも同様の意味機能をもったものと見なしても何ら矛盾抵抗は起るまい。一般に、「已然形＋ヤ」の語形は全て反語の意で解釈してしまう向きがあるが、この語形にも詠嘆、肯定的疑問、疑問、反語の意があり、特に文の中間にある場合は反語と解すべきでない事例が見られ、決して一律に解釈すべきではなからう。明らかに反語と見なすべき例は、

紫の勾へる妹を憎くあらば人妻ゆゑに吾戀目八方（二・二一）
あれこひめやも

吾妹子が結ひてし紐を將解八方絶えば絶ゆとも直に会ふまでに（九・一七八九）
とめやも

等の如きものであり、また、

あぶり干す人母在八方ぬれ衣を家にはやらな旅のしるしに（九・一六八八）
ひともあれやも

あぶり干す人母在八方家人の春雨すらを間使ひにする（九・一六九八）

の如き例である。特に一六八八、一六九八番歌に於ける「あれやも」は「あれや」とその語形は似ているが、その性格は少し異なり必ずしも同一視は出来ない。「ヤモ」は

「ヤ」に感動助詞「モ」がつくことにより、強調、詠嘆の意が更に強まり反語の意を表わすようになったものである。一方「あれや」「なれや」は已然形に間投助詞「ヤ」がついた形のまま次第にその表現が固定化されていき、時代が下るにつれて一種の文学用語として定着していったものと考えられるのである。

三

玉藻刈るからにの島に求食する水鳥あさり(注6)うにしもあれや二四毛有哉家思はざらむ(六・九四三)

足柄の箱根の嶺ろの和草の波奈都豆麻奈礼也はなつづまなれや紐解かず寝む(十四・三三七〇)

の歌に於ける「鵜にしもあれや」「花つ妻なれや」の例は、結句に推量辞を伴うものとして少し例外的なものと見なされている。従来の「已然形＋ヤ」の構文すなわち反語の意として解釈すれば、「鵜ではないのに家を思わないであろう」「花妻であろうか花妻でもないのに紐を解かないで寝よう」となって、意味の落つかないものになってしまう。諸注の解釈を見てみると、

美しい藻を刈る辛荷の島で島めぐりをする鵜でもあるといふので家を思はないのであろうか。(鵜ではない自分は家を思はずにはゐられないことよ。)(注釈)

玉藻を刈る辛荷の島で島めぐりをしている鵜でもないのに、(どうして)家のことを思わずにいられよう。

(岩波)

(玉藻を刈る)辛荷の島で島をめぐって餌をあさっているあれは鵜であるので、家を思わずにいるのだろうか。(有斐閣・全注)

とあり、

足柄の箱根の嶺の和草の花ではないが、お前が花妻なら、紐も解かずに寝ようが。(そうではないのだから打とけて寝たいのだ。)(岩波)

足柄の箱根の峰のやわらかい草の花のような妻であつたなら紐も解かないで寝ましょうよ。(全註釈)

足柄の箱根の山の和草ではないが、新婚の妻ならとにかく、そうではないのだからさあ紐を解いて一緒に寝ようよ。(有斐閣・全注)

とあって、「あれや」「なれや」が反語の意で解釈され結句の助動詞「む」に係っているとしていることは皆同様である。そして下の句の事実に対して、

そこに作者の意志がはたらき得る餘地のある場合には、下の句に対しても反語的にはたらくことがある。(澤瀉久孝「『か』より『や』への推移」八萬葉集の作品と時代Ⅴ所収)

の如き解釈がなされている。しかし、下の句に対しても上の句と同様再び反語として働くというのは何としても無理があり、「已然形＋ヤ」を反語と解することからくる下の句との矛盾を消さんがための索強のようにも思われる。これらの歌も既述してきたように、「ヤ」を反語の係助詞としてではなく、感動助詞的なものとして解釈すれば歌意に矛盾はなくなる様である。つまり、九四三番歌は「私は辛荷の島で飼を漁っているあの鵜でもあるのかしら。だから家の事を思わずにいるのであろうなあ。」と解釈し、「この様な状態で長く家から離れている自分はまるで鵜のようだ」の意で、家を思わずにはいられない自分の気持を表現したものと見なした方がいいようである。この歌は九四二番の赤人の歌の反歌三首のうちの一首であるが、そのうちのもう一首、

風吹けば浪か立たむとさもらひに都太の細江に浦隠り
居り（六・九四五）

を参看するとき、その表現に一脈通ずるものがあるとの感を強くするのである。そして、「家思はざらむ」の「む」も諸注が言うように意志を表わすものとするより、

「む」「らむ」「けむ」などの推量辭は、内容上から見るとき、後件には關係無く、寧ろ「か」「や」の包括する前件に係り、後件は飽迄眼前の事実、即ち主體の直

接確認した内容以外のものではない。（木下正俊『水鳥二四毛有哉』其他）△萬葉▽第十四号）

とあるように推量の意ととるべきであろう。以上述べて来た如く解釈することにより、この歌の「あれや」を「命令形＋ヤ」として願望の意にとったり、「アラバカ」と訓む必要もなくなり、語法上の矛盾抵抗もなく一首が解釈できるのである。また三三七〇番歌にしても同様、「花つ妻」の意が「花のように美しい妻」「初婚の妻」「花の妻」など如何なるものであるかはさておき、「足柄の箱根の山の和草ではないが、そのような初々しい妻であるからかしら。だからあの様に紐も解かないで寝るのであろう。」とする方が、歌の味わいが深くなる様である。そして同じ形式の歌、石倉の小野ゆ秋津にたち渡る雲西裳在哉時をし待たむ（七・一三六八）

も同様に解釈して差支えあるまい。その他、

郭公鳥鳴く峰の上のうの花の厭事有哉君が来まさぬ

（八・一五〇一）

鶯の通ふ垣根のうの花の厭事有哉君が来まさぬ（十・

一九八八）

の例にしても既述してきた如く、「うきことあれや」で文が切れていると見るべきであり、結句の「君が来まさぬ」の連体止めは「が」助詞が来たためであり、強調、詠嘆を表わし

たものと見るべきである。同様の歌が古今集にも、

水のおもにおふるさ月のうき草のうき事あれやねをた
えてこぬ（古今・九七六）

と見えており、その発想、表現に万葉集との違いは見られず、佐伯博士の古今集に於ける「あれや」の解釈は万葉集にも適用出来るものと考ええる。また、

雪こそは春日消ゆらめ心さへ消失多列夜言もかよはぬ
（九・一七八二）

の「たれや」は「てあれや」の融合縮約されたものであり、ここも同様に解すべきであろう。一見反語と解すべきとも思われるが、第二句を已然形で言い放ったことにより逆接的に「他ならぬ雪こそは春の日に消えもしましようが、しかし」と下に続くのであり、「たれや」においては「心までも消えてしまったのでしうかしら」と一旦句が切れ余情を残したものとする方が相応しい様である。そして、

山代の石田のもりに心おそく手向為在妹に会ひ難き
（十二・二八五六）

郭公鳥声聞く小野の秋風に芽開礼也声のともしき（八
・一四六八）

の例も同様と見なして差支えない。

以上の万葉集に於ける「あれや」「なれや」「たれや」の例を実例に則して検討してきたが、佐伯梅友博士が述べら

れた「『なれや』とある古今集の歌について」の論考は万葉集に於ても適用でき、全て一つの法則に基づいて解釈できるのである。例外とおぼしき、

ゆりも会はむと ながさむる 心し無くは 天離る

ひなに一日も 安流へ久母安礼也（十八・四一一三）

等の例は反語と解すべきものであるが、文末に於ける例であり、また佐伯博士が「秋風も未だ吹かねば」（八萬葉語研究Ⅴ所収）で述べておられる条件句に含まれる助詞「も」の関係からやや逆接的な意味を有していること、「べし」「も」の語により意味の強調が行われていることなどを考え合わせると、反語となるのは当然のことと既述してきた例と全く同一とは見なし難い。

思うに「已然形＋ヤ」の構文、特に「あれや」「なれや」には已然形そのものの性格が色濃く投影しており、「ヤ」はまだ係助詞としての機能を有するまでには到っておらず、間投助詞から感動助詞へ移行する過渡期の姿をとどめたものと見る事が出来る。従って、古今集になって疑問、反語のいずれでもない詠嘆の意味が新たに生じたのではなく、それは古い時代の語法の名残りと見るべきものであり、歌の世界において、一種の文学用語として生き残っていたものと考えることができる。

付

君が代も吾代毛所_レ知哉磐代の岡の草根をいざ結びて
な（一・一〇）

右の歌の第二句「所_レ知哉」は「シルヤ」と訓まれはぼ定訓化しているが、今だに一部で「シレヤ」の訓が行われている。これは所字の表記がなされていることによる受身つまり所相を意味する語とみなしていることからくるものであろう。しかしこの歌の「所_レ知」は明らかに四段活用で連体形「知る」であり、「哉」は間投助詞として次の句の岩にかかると解すべきものである。所字も、

ま玉つくをちこち兼ねて結びつる我が下紐の所_レ解日
あらめや有米也（十二・二九七三）

草枕旅には妻は率たれども匣の内の珠社所_レ念（四・
たまをこそおもへ（注ア）

六三五）

ぬば玉の黒髪所_レ沾_レ而沫雪の降るにや来ますここだ恋
くろかみぬれてふれば（十六・三八〇五）

の如き自動詞を表わす時につける用法と考えられる。「シレヤ」とすれば「下二段の未然形＋ヤ」とは語法上、意味上からも考えられず、四段活用已然形に助詞「ヤ」のついたものとなり、既述してきた「已然形＋ヤ」の構文ということになる。しかしそれでは、その意味機能が「あれや」

と同じであろうと反語をなす条件法であろうと、一〇番歌の歌意には全くそぐわないものとなり、ここはやはり「シルヤ」と訓むべきものと考ええる。拙稿「人知れずの解釈」（△香椎潟▽第三十一号）に於て、「知る」における四段活用と下二段活用の対立は自動詞的（所相）と他動詞的（能相）との意味の対立をなしており、従来受身として解釈されてきた「人知れず」は能相と解すべき語ではないかと述べた。ただ万葉集に於ける用例で同様に解すべき事例について、その詳細にはあえて言及を避けていたので、「已然形＋ヤ」の構文の考察にあたり「所_レ知哉」が条件法をなすものではないこと、既述してきた「あれや」等の語ともその意味機能を異にしていることに言及してみたいと思う。

春の野にあさる雉の妻恋ひに己があたりを人_{ひと}尔_に令_れ知_れ
管（八・一四四六）

の第五句は従来二通りの解釈がなされている。それは「自分の居る場所を人に知られつつ」と「自分のありかを人に知らせつつ」とであるが、これは「令_レ知」に対する解釈が、例えば、

「令知」は「所知」と同じく、下二段自動詞の「知る」は知られるの意。（注釈）

と見なすものと、

シレは知らせの意。四段の自動詞が下二段化すると、

他動ないし使役を表わすことが多い。(小学館)

と見なすものとに分かれるためである。勿論この様な受身、使役の違いというのは、

令知と書いてあることは、人に知ラセテイルということであるが、それは結果的には、人に知ラレルということになる。(岩波)

の如く表裏一体のものであり、結果的に意味することは同じではあるう。しかし、ここには明らかに使役を意味する令字の表記がなされており、筆録者の言語意識に基づいた用字意識、表記意識の反影と見なす方が正鵠を得ており、下二段の「知る」は使役の意を有するものとして語本来の意に基づいて解釈すべきであろう。ところで、

刈薦の心もしのに人不知もとなぞ恋ふる息の緒にし
て(十三・三二五五)

吾恋ふる千重の一重も人不知もとなや恋ひむ息の緒にして(十三・三二七二)

の傍線部については、前掲の拙稿でも触れたことではあるが、いずれも「ヒトシレズ」と訓むべきものである。しかし、その意味、内容、表現まで類似している両歌に対して、例えば「注釈」においては、前歌は「人に知られず」後歌は「人に知らせず」の如く、令字表記の有無から考えられた為であろうが、第五句の解釈が受身と使役に分かれてい

る。ところが、

はだ薄穂にはな出そと思ひたる情者所^{こころはしら}知^ゆ吾もよりな

む(十六・三八〇〇)

の例でも明白なように、受身を意味する助動詞「ゆ」のついたものは明らかに四段活用であり、下二段の「知る」に受身の意をもたせるのは確実性を欠くのではあるまいか。また、

吾が思ひを人^に知^る令^に知^る哉玉匣開きあけつと夢にし見ゆる(四・五九一)

の第二句は、

ヒトニシラセヤ 私注

ヒトニシラスレヤ 新校

ヒトニシルレヤ 全註釈・岩波・塙・小学館・有斐閣

ヒトニシルレカ 桜楓社

と訓まれ、その解釈も「人に知られたからか」「人に知らせたからか」と受身と使役に分かれている。しかし、前述したように受身の意とは考えられず、「ヒトニシルレカ」か「ヒトニシルレヤ」かはおくとしても、ここは下二段の已然形と見なし「人に知らせたからか」と解すべきものと思われる。さてこの様に見てくると、

父母に不^に知^る子故三宅道の夏野の草を難み来るかも

(十三・三二九六)

の第三句は、諸注「知らせない子の為に」と解釈され、そ

の訓みは「シラセヌコユエ」とあり異訓を見ないが、「知らせる」意の「知る」は下二段であることを考え合せると「シレヌコユエニ」と訓むべきではないだろうか。また、

磯の上に生ふる小松の名を惜しみ人不知恋ひ渡るかも(十二・二八六一)

の第四句は「ヒトニシラエズ」と訓み、「人に知られずに」と解釈されている。しかし或本歌には、

岩の上に立てる小松の名を惜しみ人^{ひとには}尔者不^{いはず}云恋ひ渡るかも

とあり、第四句が「人には云わないで」と能動的、積極的な意を有する語となっている他はほぼ同一である。とする
と、「人不知」を「ヒトニシラエズ」と訓むよりは、「ヒトシレズシテ」と訓み「人に知らせないで」と解釈する方が、或本歌の異伝歌とも符号し、歌本来の意にも近いと思われる。この様に見てくると、

石枕 苔むすまでに 新た夜の 幸く通はむ 事計り
夢^{ゆめ}尔^に令^を見^み社^を 剣^{つるぎ}大刀^を 斎^いひ祭^{まつ}れる 神^{かみ}にしませば

(十三・三三二七)

の傍線部も、代表的な注釈書に、

イメニミエコソ 塙・桜楓社・小学館
イメニミセコソ 注釈・岩波・有斐閣

の両訓が見えるが、令字の使用がなされているにもかかわ

らず「ミエコソ」の施訓がなされているのは、

相^{あふと}跡^と所^{みえこそ}見^み社^を(十三・三三八〇)

相^{あふと}所^{みえこそ}見^み欲^を(十三・三三八一)

夢^{いめに}所^{みえこそ}見^み欲^を(十三・三二八三)

をはじめとする、

夢^{いめに}所^{みえこそ}見^み社^を(十一・二六三四)

開^{さきて}而^{みえこそ}所^{みえこそ}見^み社^を(十・一九二八)

都^{つぎて}伎^{みえこそ}提^{みえこそ}美^{みえこそ}延^{みえこそ}許^{みえこそ}曾^{みえこそ}(五・八〇七)

嗣^{つぎて}而^{みえこそ}所^{みえこそ}見^み与^を(十二・二九五九)

等の例により慣用的常套句の可能性が強いためであろうと推察される。しかし、令字は前述した様に使役を表わす助字であり、三三二七番歌は前掲の「ミエコソ」の例と相違して、相手に「夢に見られてほしい」という意ではなく、「幸く通はひ事計り」を「神」にお願いしているのであるから、ここは即字的にやはり「イメニミセコソ」と訓み、「夢に見せて欲しいものです」と解釈する方が当を得ているものと考ええる。逆に、

朝戸あけて物思ふ時に白露の置ける秋萩所^{みえこそ}見^み喚^{みえこそ}鶏^{みえこそ}本^{みえこそ}
名(八・一五七九)

は所字に即して「ミエツツモトナ」と訓まれて現在異訓はなく、意味上もこの施訓で齟齬抵触もないが、

かく故に見じと言ふものをささ波の古き都を令^{みせ}見^み乍^{みせ}

もとな
本名(三・三〇五)

咲けりとも知らずしあらば黙もあらむこの秋萩を令^{みせ}
視管本名(十・二二九三)

追都母等奈(十七・三九七六)

からするとむしろ「ミセツツモトナ」と訓みたいところである。所字を使役的に用いたと見なされる、

醬酢に蒜つきかてて鯛願ふ吾^{われ}尔^に勿^な所^み見^せ水葱の羹物

(十六・三八二九)

の如き例も存在するからである。

要するに、下二段活用の「知る」は、四段活用の「知る」に対して他動詞的であり、能相的、使役的な意味を有する語であって、語法的にも二者ははっきり区別すべきものである。従って、一〇番歌の「所知哉」に「シレヤ」の施訓は不可能であり、考察してきた「あれや」「なれや」の場合ともその性格を全く異にしているものである。

(注1) 引用例の本文は左記によった。

○万葉集——「萬葉集△桜楓社▽」

○古今集、新古今集、新撰万葉集——「新編国歌大観」

○記歌謡——岩波古典文学大系

○歌経標式——日本歌学大系

○万葉集の用例は、巻数と国歌大観番号のみ記す。

(注2) 森重敏「『か』より『や』への推移續貂△萬葉學論叢▽所収」参照

(注3) 「雪波布礼之」の「之」は「也」の誤写である可能性もあり、「也」とすればより良き用例となるであろう。

(注4) 同じ歌が古今集二五番に「秋ののにおくしらつゆは玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ」とある。

(注5) この訓みは鶴久先生のご指摘による。

(注6) (注5)に同じ。

(注7) 紀州本「所見」に作る。